

「水戸黄門」が終わる

人生楽ありゃ苦もあるさ～ くじけりゃ誰かが先に行く。
後から来たのに追い越され 泣くのがいやならさあ歩け。

★

パナソニックドラマシアター「水戸黄門」の主題歌。「ああ人生に涙あり」が、この歌の正式タイトルとのこと、知らなかった。黄門様が始まったのは40年も前のことで、まだ松下幸之助さんもお元気だった。確かに当時は、こんな歌詞もありだったかも。それにしても、この詩はなかなか書けるもんじゃない。作詞は山上路夫という人らしい。あんまり素晴らしいので、私も自作の絵本「ちゃいろにわとりのちゃーぼう」の中でこの詩のアイデアを継承した。

★★

黄門様役は、何と言っても初代東野英治郎がよい。2代目を演じたのは西村晃で、初代とよく似た人だったような気がするが、役者の顔も黄門様の姿も思い浮かばない。3代目は佐野浅夫らしいが、知らない人だ。4代目は石坂浩二で、5代目はかつて助さん役だった里見浩太郎。助さんが黄門様になるなんてあんまりだ。ズーッと水戸黄門を観ている人は、里見黄門様の第一話をどんな気持ちで観たのか？違和感があつたに違いない。(私は20年以上観ていないが)

★★★

黄門様のおかげで地方自治・住民自治が育たなかったかのような論調がある。確かに一理ある。印籠一発でトラブルを解決するとか、葵の御紋の権威とヒーローの仁徳の前に全ての人がひれ伏すなんてマンネリが40年も続いたのだから、少しは影響があつただろう。地域づくりの仕事をする中で、黄門様のリーダー待望論の人がまだまだ多いと実感する。しかし、長年の政治空転や3.11を経験したこの国では、さすがにもう黄門様は流行らない。視聴率の低下とかではなく、寿命が尽きたというのが、番組終了の理由と言うか意味だろう。

★★★★

- さて、黄門様の最終話は、いったいどんなエンディングになるのだろうか？例えば、・・・
- ①黄門様が印籠を出したところ、町娘たちが黄門様に群がりキャーキャー言いながらVサインしたり、傍若無人な振る舞いをするに至り、黄門様、ついに引退を決意する。
 - ②「助さんや、正体を明かすのはよしませう。ここは民の熟議を促し、自ら治るを期すことにいたそう」と言って、黄門様、印籠を封印する。
 - ③黄門様、病の床にて、「なんじゃもんじゃあつたが、結局、諍いや不正や悪徳を求め続けたのは私だった。それなしには生きていけなかった。世直しは一つもできなんだ」とつぶやく。
 - ④将軍や幕閣たちに厳しく意見し、治政の乱れを正し、カッカカッと笑う。
 - ⑤ラストシーンにて、黄門様、後から歩いてきた群衆に飲み込まれ、姿を確認できなくなる。

★★★★★

パナソニックは、インドで、韓国メーカーへのチャレンジャーとして市場参入にやっきになっている。泣いてなんかいられない。歩くしかない。パナソニックがチャレンジャーであるって、なんて素晴らしいことでしょう。あのパナソニックが挑戦する姿に、ものすごく活力を感じ嬉しくなる。そこに将来の“明るい国家”が見える気がする。その点、黄門様って、最初からお爺さんだし、チャレンジャーであつたことは一度もない。「泣くのが嫌ならさあ歩け」なんて、おそらく誰にも一度も言わなかった(ホントに言っちゃったらイヤラシ過ぎるけど)。